

民俗学の水脈——伝統の創造と継承を願って

岸本誠司

一九九〇年に文芸学部に入學、学部の四年間、修士課程の二年間を終え、学部副手勤務五年、その後の民俗学研究所研究員（嘱託）や非常勤講師時代を含めると、私は文芸学部に一四年ものあいだ関わってきたこととなる。どうやら卒業生でこれほど長い間文芸学部に関わった者はあまりいないらしい。長い時間文芸学部に関わってはいしたが、その間文芸学部の全体を把握するような立場にいたわけではないので、この紙幅では、私が薫陶を受けた民俗学分野での体験を振り返ってみることにしたい。

私が文芸学部文化学科に入學したのは一九九〇年、文芸学部設立の二年目にあたる年だった。一九九〇年前後の学生は第二次ベビーブームに相当する世代で、将来確実に到来することがわかっていた少子高齢化や学生減少による大学再編成の陰は、実感としてどこにも感じられなかった。バブル最盛期とも

重なったこともあるかもしれないが、文芸学部を包んでいた雰囲気は、豊かなで国際的な時代に向かって華々しくスタートを切った新学部の勢いそのものとして感じられた。このような雰囲気は、各界で活躍され文芸学部に赴任した教授陣、大学事務局、学生が共有したものだった。当時の文化学科は現在のようなコース制にはなっておらず、各教授陣が専攻する政治学、マスコミ、哲学、歴史学、考古学、民俗学、社会学といった人文分野を広く横断的に学ぶことができたことが魅力とされていた。単位制度も一科目通年四単位で、夏期休暇もたっぷり2ヶ月あり、教員学生ともゆとりのある時間のなかで、研究や学生生活に向き合っていくことができた、いま思えば希有な時代であった。

「○○学研究室」という大学に設置された学問枠にそって研

究者が代謝してゆくような歴史のある国立大学とちがい、私立大学の多くは現行教授陣の構成やそのパワーバランスによって運営内容に可塑性をもつため、一つの学問分野が長く学部内に存在する保証はない。そのなかにあって、民俗学の分野は学部設立から二〇年近くたった現在でも健全に代謝しているようで、学徒のひとりとして純粋に喜ばしく思っている。

大学の付属研究機関である民俗学研究所が開設されたのが一九八七年。その二年後にスタートした文芸学部でも、化学科の柱のひとつとして民俗学が位置づけられ、民俗学研究所の初代所長を務められた谷川健一先生をはじめ、野本寛一、胡桃沢勘司ら諸先生とともに確かな存在感をもっていた。当時、関西で民俗学を学ぶことのできる大学の多くは史学科のなかに位置づけられていたこともあって、「歴史民俗学」を学問スタイルとして標榜する大学や研究室が多かった。そうしたなか谷川野本、胡桃沢体制でスタートした「近大民俗学」は他の大学にはどのように映っただろうか。鋭く豊かな感性によって古代から現代までを範疇とする民俗学の大家谷川健一、いまや徹底したフィールドワーカーの代名詞として知られる野本寛一、柳田国男門下胡桃沢勘司を祖父に持ち歴史学と民俗学を横断する胡桃沢勘司、いずれもそれまで関西には無縁だった研究者であったがゆえに、歴史学ありきの関西民俗学のスタイルにとらわれることなく、奔放かつ縦横無尽な研究活動を行うことができたように思う。

そうした近大民俗学の学風をひしひしと肌で感じるようになったのは、修士課程に進んだ頃だっただろうか。関西在住の私と同世代の学徒が近大民俗学に感じたのは、その「勢い」だったようだ。臆することなく現場に向かう姿勢と、絶対的なフィールドの活動量に関しては、関西のどの大学にも決して劣らないものだったに違いない。今にして思えば、学生や院生たちのその「勢い」が慎重な方法論や研究史に裏付けられるものでなくとも、「歩く、見る、聞く、そして考える」という民俗学の最大の魅力に支えられたものであったのは間違いない。

かくいう私は、このような近大民俗学を支えたひとりの教授野本寛一に師事し、その後一五年以上にわたって多大な薫陶を受けている。「地域やムラは急激な勢いで変化している。君たちは、伝統的な生き方を知る日本人に会える最後の世代だ」、私が学部生だった一九九〇年頃、野本先生から再三にわたってこうした言葉を投げかけられた。当時の私はこの「最後の世代」という言葉に少なからず心を動かされたのを記憶している。国際化やバブル社会などと世の中は騒がしいけれど、世間や社会があまり注目しないものなかにこそ実は大切なものがあるのではないかと考えたのだ。当時の状況を思えば、選択した学問分野ではかなりのマイナー志向なのだろうが、実際、民俗学の講義で聞かされる日本各地の多様な豊かな民俗や古来たちのいくつもの人生の群にただ驚嘆し、興奮を覚えたのは私だけではなかったはずだ。そこに登場する人々は、明治末から

大正時代生まれの私たちの祖父母に相当する世代の人々だった。私たちは果たして祖父母たちが経験してきた人生や価値観についてどれほどのことを知っているだろうか。学校教育を通じて多くの知識を教えられてきたが、それは地域に背を向け都會で生きるための知識ではなかったか。地域に生き、人々とながら、周囲の自然と折り合いをつけながら生きてきた祖父母たちと私たちの世代との日本人としての格差とは何だろうか。右肩上がりの人口増加や経済発展のうねりのなかにあったこの半世紀のあいだに日本人としての本質的な変化があったのではないか。そういう気持ち強く抱くようになった。そして、ゼミに入って本格的に民俗学の勉強を始めるようになるにつれ、その思いは確信に変わっていった。

二〇〇七年三月、野本寛一先生の近畿大学退職と古希を祝う会に七〇余名の在校生・卒業生が集った。野本研究室で学んだ学生の総数はおよそ一四〇名、みなそれぞれ仕事や家庭をもち一人前の社会人として日常を送っていた。研究の道に進んだ者が数名、また仕事をもちつつ民俗学をつづけている者も数名いる。民俗学研究室では、毎年夏に三回生が中心となって民俗調査演習を行い、その成果を民俗誌体裁の報告書として刊行してきた。一九九三年に刊行された大阪府河内長野市天見の民俗誌に始まり、二〇〇八年刊行の奈良県五條市白銀にいたるまで現在、計一四集が刊行されており、貴重な民俗資料として学会でも認知されている。卒業生の多くは、この民俗誌作成の体験や

その後の卒業・修士論文作成にあたって経験したフィールドワークを、在学時代の貴重な体験として記憶しており、この集いでも在学時代のフィールドワーク経験のさまざまな感想が話題にあがっていた。期待と不安を併せ持ちながら、自分の力で地域の人々との関わりを作り出す民俗学のフィールドワークの経験は、社会にでてどのような仕事についても貴重な礎となっていたのだ。また、卒業後、社会人として仕事をもちながら、在学時代より続けた研究の成果を単著として上梓した青柳智之氏（『雷の民俗』大河書房）、谷坂智佳子氏（『自家用茶の民俗』大河書房）の存在は、一社会人として在野に身をおき民俗学に関わっていくよい前例になっている。

平成一八年の夏、他の調査もあつて帰阪した際に、滋賀県米原市志賀谷でおこなわれた民俗学研究室の調査合宿に顔を出した。そこでちょうど取材に訪れていた日本経済新聞社の記者と野本先生との間に交わされた会話が心に残っている。

「近畿大学には、このように民俗学を学ぶ若者が多くいます。でも、私は彼たちに必ずしも研究者になつて欲しいと思つてはいません。さまざまな地域に行き、多くの先輩たちの人生に耳を傾ける。そうした経験を積んで、彼たちひとりひとりが『いい日本人』になつてゆけばいいんです。日本の将来はそうした若者たちが支えてゆくべきですから——」

文芸学部が創立して二〇余年の年月がたち、多くの卒業生は

在学時代の経験を誇りとして社会で活躍している。築き上げてきた伝統を守り、これからも骨太の日本人を輩出する学部として発展することを心から願っている。

(終わり)